

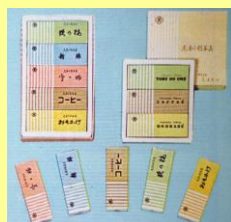
小形羊羹 80 年

2010 年 4 月 25 日、小形羊羹が誕生 80 年を迎えます。

今回は、小形羊羹の誕生秘話をお伝えいたします。



昭和 5 年 (1930) より



昭和 38 年 (1963) より



昭和 41 年 (1966) より



昭和 60 年 (1985) より



平成 2 年 (1990) より



平成 18 年 (2006) より



平成 20 年 (2008) より

小形羊羹が誕生したのは今からちょうど 80 年前、昭和 5 年 (1930) のこと。虎屋 15 代店主・黒川武雄が大勢の人に気軽に買ってもらえる菓子を作りたいと思ったのがきっかけでした。フランスの化粧品会社コティの香水箱をヒントに、手のひらサイズのパッケージを考案。アルミ箔で包んだ小倉羊羹『夜の梅』と黒砂糖入羊羹『おもかげ』を、1 箱に 1 本ずつ入れ、15 銭で売り出しました。当時とらやの羊羹といえば今の大棹羊羹 (NET1400g) で、一口サイズの小形羊羹 (大棹羊羹の約 1/30) は斬新でした。

考案したときの様子を武雄は次のように語っています。

「大正時代のことである。六大学の野球をよく見に行った。野球が終ってゾロゾロと帰る道すがら、よく考えた。こんな大勢の人達にたやすく買ってもらえるお菓子を作りたい、と思った。夢にさえ考えた。 たまたまフランスのコティの香水をもらった。大きさもよし、化粧箱も簡単であり、清楚である。これだ、この大きさだと思いついて、羊羹の小さいのがよい。 夜の梅と俤 (おもかげ) の小さいのをこしらえて、アルミ箔で包んだ。化粧箱もできて来た。ただ大きな羊羹を小さく切るのが、困難だ。その折、店に辻末太郎という人が居たが、工夫して、小さく切る器具を考案した。

夜の梅、おもかげの小形が 2 個入って、1 箱が 15 銭で売り出した。当時としては決して安いとはいえなかった。」

こうして、昭和 5 年 (1930) 4 月 25 日、小形羊羹は発売されました。ところで、武雄独自の発案であるこの形状に目を付けて、たちまちまねをした菓子屋がいたらしく、武雄は先の文章に続けて「私が永いこと苦勞して考えた小形羊羹を売り出したら、2 ヶ月もたたぬ間にどこかで、小形羊羹を売り出した」と嘆いています。

その後、昭和 38 年 (1963) には「新緑」「空の旅」「珈琲」が追加され、1 本ずつの販売となります。しかし 41 年 (1966) には同種の 2 本入を 1 箱とし、新装発売。その後何回かデザインの変更があり、平成 18 年 (2008) には「気軽に」「より大勢の方に」「簡便に」という当初の思いをさらに進め、再び 1 本ずつの販売としました。同時に「珈琲」に代わって「はちみつ」が登場しました。

小形羊羹



右から

よる うめ
夜の梅 小倉羊羹

そら たび
空の旅 白小豆入羊羹

はちみつ 蜂蜜入羊羹

しんみどり
新緑 抹茶入羊羹

おもかげ 黒砂糖入羊羹

各1本 210円(税込)
7.9×2.8×2.0cm NET50g
賞味期限：製造から1年



5本入 1,155円



36本入 7,875円



10本入 2,205円



48本入 10,500円



14本入 3,150円



96本入 21,000円



18本入 3,990円



24本入 5,250円



とらや

お問い合わせ先：株式会社 虎屋 社長室 広報課

電話：03-3408-4128